

Use of 2 Types of Air-cell Mattresses for Pressure Ulcer Prevention and Comfort Among Patients With Advanced-stage Cancer Receiving Palliative Care: An Interventional Study

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2020-11-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00060012

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



様式4A

学位論文要旨

学位請求論文題名

Use of 2 Types of Air-cell Mattresses for Pressure Ulcer Prevention and Comfort Among Patients With Advanced-stage Cancer Receiving Palliative Care: An Interventional Study
(緩和ケアを受ける進行がん患者における褥瘡予防と寝心地に対する2種類のエアセルマットレスの有用性：介入研究)

著者名・雑誌名

Akiko Marutani, Mayumi Okuwa, Junko Sugama

Wound Management & Prevention, 65:5, 2019. doi: 10.25270/wmp.2019.5.243.

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻

領域	看護科学
分野	慢性・創傷看護技術学
学籍番号	1429022022
氏名	丸谷 晃子
主任指導教員名	大桑 麻由美
副指導教員名	須釜 淳子

【背景】

緩和ケアを受ける進行がん患者の目標は Quality of life (QOL) を維持・向上することである。しかし、緩和ケアを受ける進行がん患者の褥瘡有病率は 22.6% であり、これは全国調査による大学病院 1.16% よりも高く、褥瘡発生に至る場合は QOL 低下に影響する。そのため、褥瘡ハイリスク状態の患者に対しては褥瘡予防ガイドラインに準拠した体圧分散マットレスを使用することが推奨されているが、褥瘡発生患者の中にはエアマットレスの寝心地の不快感、動きにくさを理由にエアマットレスの使用を拒否し、褥瘡が発生している現状を認めた。これより、進行がん患者の褥瘡予防には、褥瘡予防と寝心地に対する双方の相反する事象に対する問題を解決することが必要であるが、これらを両立する体圧分散ケアの指標は未だ確立されていない。

我々はエアマットレスを短期間使用する術後患者においてデュアルフィットエアマットレスが寝心地が改善することを確認しており、このエアマットレスならば進行がん患者の褥瘡予防と共に寝心地を改善し、長期使用が可能になるのではないかと考えた。

【目的】

本研究の目的は、緩和ケアを受ける進行がん患者におけるデュアルフィットエアマットレスの有効性を褥瘡予防と寝心地観点から評価することである。

【方法】

1. 研究デザイン：介入研究
2. 対象者の選定：組入基準は褥瘡ハイリスク状態の緩和ケアを受ける進行がん患者である。除外基準は褥瘡保有者、不同意の患者とした。調査施設は皮膚・排泄ケア認定看護師を含む褥瘡対策チームにより、ガイドラインに準拠した褥瘡予防ケアが提供されており、かつ緩和ケアチームによる緩和ケアが提供されていた。
3. ランダム化：介入群と対照群を交互にランダム化した。
4. ブラインディング：エアマットレスの盲検化は研究の説明、同意が得られる迄である。
5. 手順：介入群は「圧切換型、交換型エアマットレス（デュアルフィットエアマットレス）」、対照群は「圧切換型、上敷型エアセルマットレス（2層式エアマットレス）」であり、各々には専用ポンプが備わっている。
6. データ収集：調査項目は基本情報、疼痛の有無、全身状態、褥瘡危険要因、エアマットレス使用期間、褥瘡発生の有無、寝心地の不快感の有無である。痛みは Numeric rating scale (NRS) で評価した。褥瘡発生時は部位と深達度を DESIGN-R[®] にて評価した。寝心地は安静時、活動時で調査した。
7. 分析：褥瘡発生と寝心地は介入群と対照群を比較検討した。
8. 倫理的配慮：本研究は倫理審査委員会の承認を得て実施した。対象に研究の目的、方法を説明し、同意を得た。患者の体調には十分配慮し、褥瘡発生時は、速やかに医師と皮膚・排泄ケア認定看護師に報告後、適切な対処を実施した。

【結果】

1. 対象の背景：適格性評価 123 名、ランダム化 73 名、解析対象者は介入群 23 名、対照群 29 名であった。基本属性に有意差は無かった ($p < 0.05$)。両群の痛みスコアの中央値は介入群 NRS5、対照群 NRS4 であり、有意差を認めたが、これは中等度の痛みの強さの範囲であった ($p < 0.05$)。体圧の中央値は介入群 28.4mmHg、対照群 26.0mmHg であり、有意差を認めたがこれは褥瘡予防に有効とされる 40mmHg 以下の範囲であった ($p < 0.05$)。エアマットレス使用期間の中央値は介入群 17 日間、対照群 32 日間であり、有意差は無かった ($p = 0.07$)。
2. 褥瘡発生：褥瘡発生は介入群 13.0% (3 名)、対照群 17.2% (5 名) であり、有意差は無かった ($p = 0.49$)。深達度は殆どが d2 (真皮までの損傷) であり、浅い褥瘡であった。
3. 寝心地：安静時において、介入群は対照群より「沈み込み」「ずれ」「背部圧迫感」において「不快感」が有意に低下した ($p < 0.05$)。活動時において、介入群は対照群より「動作姿勢が不安定」「臀部浮遊感」において「不快感」が有意に低下した ($p < 0.05$)。

【考察】

本研究の知見は緩和ケアを受ける進行がん患者に、デュアルフィットエアマットレスを使用することは褥瘡予防効果があること、寝心地を改善する可能性があることである。

両群の褥瘡有病率に有意差は無く、デュアルフィットエアマットレスは褥瘡予防効果を低下しなかったと考えられた。介入群は寝心地の不快感が低下した。寝心地の不快感が低下した要因にはエアセルの形状によるフィット性が身体の安定性を高めたこと、専用ポンプによる内圧調整介助が動きの安定性を高めたことが影響していると考えられた。

研究の限界はエアマットレスの盲検化が困難であったこと、両群に背部圧迫感がありエアマットレスの寝心地改善には限界があることであった。

【結論】

本研究は、緩和ケアを受ける進行がん患者に対してデュアルフィットエアマットレスは褥瘡予防効果が得られること、安静時と活動時の寝心地を改善することを明らかにした。